



中部大学



中部大学

2025 中部大学民族資料博物館 秋季企画展

中部大学国際関係学部

創設40周年記念展

～私とフィールド、私のコクサイ



中部大学民族資料博物館
MUSEUM OF ETHNOLOGY ART CHUBU UNIVERSITY

中部大学民族資料博物館

MUSEUM OF ETHNOLOGY ART CHUBU UNIVERSITY

INTERNATIONAL
STUDIES
40TH
ANNIVERSARY EXHIBITION

2025 中部大学民族資料博物館 秋季企画展

中部大学国際関係学部

創設40周年記念展

～私とフィールド、私のコクサイ

2025年11月1日[土]～12月22日[月]

主催／中部大学民族資料博物館

協力／中部大学国際関係学部

会場／中部大学民族資料博物館

03 ——— ごあいさつ
中部大学国際関係学部長／中部大学民族資料博物館長 中野 智章

序文
04 ——— 中部大学国際関係学部の歩み

06 ——— 中部大学国際関係学部教員の主な専門分野と研究フィールド

08 ——— 国際関係学部と民族資料博物館のコレクション

研究紹介・図版・解説

10 ——— 研究紹介Ⅰ 文化人類学・トルコ研究 / 中山紀子 国際関係学部教授

14 ——— 研究紹介Ⅱ エジプト学・考古学 / 中野智章 国際関係学部教授

18 ——— 研究紹介Ⅲ イギリス文学・ヨーロッパ文化 / 伊藤裕子 国際関係学部教授

22 ——— 研究紹介Ⅳ 音楽人類学・民族学 / 宗婷婷 国際関係学部准教授

コラム

26 ——— コラム1 「ハイブリッド・プロジェクト」

27 ——— コラム2 「エジプトの調査」

資料編

28 ——— 企画展 「中部大学国際関係学部創設40周年記念展～私とフィールド、私のコクサイ」出品リスト

凡例

1. 本書は、2025年11月1日から12月22日にかけて中部大学民族資料博物館において開催する、2025秋季企画展「中部大学国際関係学部創設40周年記念展～私とフィールド、私のコクサイ」の展覧会図録である。展覧会の主催は次のとおりである。
主催：中部大学民族資料博物館 / 協力：中部大学国際関係学部
2. 本展覧会の企画・構成及び本図録の編集は、中部大学民族資料博物館の中野智章、大場裕一、中村正男、原田千夏子が行った。
〔コラム〕執筆担当（中野：N）、「国際関係学部と民族資料博物館のコレクション」執筆担当（原田：H）
3. 本書の図版に付した番号は、出品資料の一部であり、出品リスト、および展覧会会場の陳列順とは必ずしも一致しない。
4. 各章別の解説は、研究紹介で掲載している各研究者による。担当の内訳は次のとおりである。
〔研究紹介Ⅰ〕文化人類学・トルコ研究：中山紀子（国際関係学部教授）、〔研究紹介Ⅱ〕エジプト学・考古学：中野智章（国際関係学部長・教授／民族資料博物館長）、〔研究紹介Ⅲ〕イギリス文学・ヨーロッパ文化：伊藤裕子（国際関係学部教授）、〔研究紹介Ⅳ〕音楽人類学・民族学：宗婷婷（国際関係学部准教授）
5. 本書掲載の「主要展示資料一覧」の一部の資料については、ページスペースの点から、資料名称の前に関連国と民族を記載する表記順とした（本書内の資料解説における名称表記と一部異なる）。

* 画像のうち、「研究紹介」の風景写真、調査活動写真は、各研究者による撮影。本書9頁の扉画は、『Egyptian Grammar（古代エジプト語文法）』[出品リスト No.12]より。その他、学部の活動に関する記録画像は中部大学国際関係学部による提供。その他、本書収録の写真について、一部に確認がとれないものがありました。情報をお持ちの方はお寄せくださいますよう、お願いいたします。

ごあいさつ

1984年（昭和59年）に我が国初の国際系学部の一つとして誕生した中部大学国際関係学部は、昨年創設40周年を迎えました。今でこそ「国際」と名のつく学部や学科は全国で100を超えますが、『学校法人中部大学七十年史』に記された当時の言葉を要約すれば、「創設時には非常に野心的な存在で、設置された社会科学系の国際関係学科と人文社会系の国際文化学科には各分野の重鎮とされる教授陣が加わり、その陣容は文部省（当時）の担当官が驚くほどであった」とあり、高等教育界において注目される新学部であった様子がうかがえます。

当時は1970年代における東西の緊張緩和、いわゆるデタントがソ連のアフガニスタン侵攻によって破綻し、対立が再燃した新冷戦と呼ばれる時期でした。「偉大なアメリカ」という、近年トランプ大統領が頻繁に用いることで有名なフレーズを掲げたレーガン大統領は当初ソ連と敵対関係にあり、我が国においても外交政策や安全保障、国連の役割などが問われる中での学部創設はまさに時流を得たものでしたが、ベルリンの壁が崩壊した1989年11月以降は一転して国際秩序の再編やグローバル化が進み、製造業や輸出関連企業が強い中部圏での国際志向に拍車がかかりました。90年代初頭のバブル経済崩壊後は今日に至るまで日本企業の競争力や円の価値が低下を続け、近年では円安の影響で訪日客数が歴史的水準に達する一方、国外に目を転じればガザとイスラエル、ウクライナとロシアにおける戦争など世界情勢はさらなる混迷の中にあり、国際関係学部を取り巻く環境は再び大きな転機を迎えつつあります。

このように40年という時の流れの中で学部を取り巻く国内外の環境は大きく変動しましたが、国内はもとより世界を知ることで知識を蓄えるだけでなく、その背景にある言語やさまざまなものの見方や考え方を理解し、政治・経済・社会・文化の諸分野から国際社会のあり方を総合的・包括的に分析する学部の姿勢は変わらず、今も昔も教員と学生がともに学ぶ空間が生き続けています。

本展覧会では、そうした教育研究の場で重要な役割を担ってきたフィールドワークを一つのテーマに掲げました。フィールドワーク、すなわち大きなくくりで言うところの現地調査は、国際関係学部が重視する、世界を知るための重要な調査手段の一つですが、さまざまな学問分野を専門とする教員が集う国際関係学部では、一口にフィールドワークと言ってもその方法や内容は決して同一ではありません。一般的には文化人類学などにおける参与観察といった調査法のイメージが強いと思いますが、今回の展覧会ではインタビュー調査や史料調査、発掘調査などを含めた形でその幅広さを紹介します。それぞれの教員が取り組む調査の成果は新たな発見や気づき、現地の声や体験などとも相まって教育と研究に活かされ、学生たちに多面的な思考を育む手掛かりを与えています。

最後に今回ご協力を頂いた教職員や民族資料博物館のスタッフの皆さま、そしてさまざまな形でご尽力並びにご協力を頂いた関係各位に深く感謝を申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。「中部の国際」における学びの広さや深みの一端を感じて頂きながら、未来の学部におけるフィールドワークのあり方についても思いをはせて頂けましたら幸いです。

2025年（令和7）10月

中野 智章

（中部大学国際関係学部長、中部大学民族資料博物館長）

中部大学国際関係学部の歩み



1984年の創設以来、中部大学国際関係学部は国際社会の急速な変化とともにその姿を変えながら、発展を続けています。創設時の背景には前身である中部工業大学(1964年開学)が20周年を機にそれまでの理工系中心の構成から脱却し、総合大学への転換を図るという大きな構想がありました。1984年4月、経営情報学部とともに新設された国際関係学部は日本初の国際系学部の一つとして「国際関係学科」「国際文化学科」の二学科を擁し、社会科学・人文科学系の教育を担う学部としての歩みを始めました。同時に大学名は中部工業大学から中部大学へと改称され、現在では工学部・経営情報学部・国際関係学部・人文学部・応用生物学部・生命健康科学部・現代教育学部・理工学部の文理医教8学部からなる中部圏有数の総合大学としてその名を知られています。

設立当初より、国際関係学部は国際的視野をもった人材育成を使命とし、語学教育とともに国際政治・経済・文化に関する総合的な教育を展開しています。また世界各地の民族資料の収集にも力を注ぎ、1992年には「民俗資料室」が設置されました。これが本展覧会の舞台となる民族資料博物館へと発展し、文化理解を重視した実践的な学びの拠点となっています。こうした取り組みは教育の内容にさらなる深みと広がりをもたらし、国際関係学部はもとより大学全体の学生たちにとっても多角的な学びの機会を提供しているところです。

また1991年に大学院国際関係学研究科修士課程、2001年に博士課程が開設され、学びをさらに深化させる場が整いました。以後、国際関係学部は研究と教育の両輪を強化しながら学術基盤を築き、学内外での存在感を高めていきます。

1990年代から2000年代にかけては国際交流や語学教育、地域研究、比較文化論といった多様な分野において、国内外の課題に目を向けた教育カリキュラムの整備が進みました。特に、英語・中国語を中心とした語学教育の充実(2009年には中国語中国関係学科を設置)、ゼミナール制による少人数教育の推進、海外フィールドワークや留学制度の整備など、学生の主体的な学びを促す体制が整っていったことは、本学部の大きな特徴です。加えて2020年まで存在した名古屋キャンパスでは、JR鶴舞駅の目の前という好立地を活かし「文明の視角」などの学部シンポジウムが頻繁に開催され、学部の学びを一般に公開する試みもなされました。

その後2016年には学科再編が行われ、それまでの三学科が統合されて「国際学科」が新設されました。この改革により、より一体的で柔軟なカリキュラム運営が可能となり、現代社会の多様な国際課題に対応するための教育体系が再構築され現在に至っています。教授陣も学部創設当初から政治、経済、法、社会、文化など多岐にわたる専門分野を持つ研究者で構成され、学際的な視点からの教育を可能にしています。

民族資料博物館の整備と学部教育との連携も、ユニークな取り組みの一つです。アジア・アフリカ・南米など世界各地の民族資料を実物で学ぶことができる環境は国内の大学でも珍しく、「陸と海の交流史」といったテーマやさまざまな企画展を通じて文化理解を深める貴重な教育資源となっています。学生や教職員をはじめ広く一般にも開かれた館は、資料を活用した授業や展示活動などから、知識だけでなく「体験を通じた理解」を深めることに寄与しています。

近年では、持続可能な開発目標(SDGs)やグローバル社会の課題に応える教育の必要性が高まる中、国際関係学部もその役割を再定義しています。国際学科では、異文化理解・地域研究・国際協力・多言語教育といった分野において実

践的なアプローチを重視し、社会課題に向き合える人材の育成に注力してきました。「ハイブリッド・プロジェクト」と銘打った、複数の教員と学生が少人数で共通のテーマをさまざまな学問的観点から議論するプロジェクト型授業や、フィールドワークを取り入れた学修スタイルを積極的に導入し、学生が自ら課題を設定し、解決策を考える姿勢を育む教育が展開されています。さらには学生による発表会や国際イベントも開かれており、学外の人々との交流や実践の機会も多く提供されています。例えば「国際サロン」は学生と教員がテーマを定めて発表やディスカッションを行ったり、学外のゲストを招いたりするなど、異文化理解や国際社会の課題を考察する場として活用されています。こうした取り組みは、知識と体験を融合させる学びの場としても機能しているところです。

創設から40年を経た今日、最初期の卒業生たちは還暦を過ぎたあたりの年齢を迎えています。公務員や企業の国際部門といった当初は多かった就職先も、今日では世界とつながりのない職種を探すことは難しいといっても過言ではない時代となり、観光や流通、金融・航空・メディア関連など非常に幅広い分野で活躍し、語学力や国際感覚を活かす場がますます増えつつあります。また中部大学大学院をはじめとする大学院へ進学して研究者の道を歩んだり、各地の大学で教鞭を執る卒業生も出てきています。

このように、激しく変化する国際社会の中で教育・研究の両面において時代の要請に応えながら進化を続けてきた国際関係学部は、語学と国際関係、文化理解と現代社会の課題解決を架橋する学びの場として、これからも世界を知り、地域とつながる「行動できる、心豊かな人間」の育成をめざし次なる50周年、そしてその先へと歩みを進めて参ります。

(中野 智章 / 中部大学国際関係学部長・教授)



国際関係学部創設時の海外研修(シンガポール・マレーシア)



国際関係学部第10回恵那研修(国際文化学科)



「文明への視角」シリーズ第1回
イラク戦争：イラクの立場から



中部大学国際関係学部論集
「貿易風」



国際関係学部創設10周年記念シンポジウム会場の様子

中部大学国際関係学部教員の主な専門分野と研究フィールド

1984年の創設当初から、世界の各地域をフィールドとし、人文科学系・社会科学系の多彩な学問分野を専門とする教員を集め、政治・経済・社会・文化といった側面から国際社会のあり方を総合的・包括的に分析する学部の伝統は今も引き継がれている。

日本で最初につくられた国際関係学部の一つだからこそ、他大学のコクサイと異なる多くの「学問分野」や「扱う地域」があります。あなたの興味に合うコクサイはどれ？

The map highlights various regions and their corresponding academic fields and researchers:

- イギリス**: 英文学 (イギリス文化), 国際金融論 (国際貿易論). 伊藤 裕子, 高 英求.
- ベルギー**: 日米欧外交史 (国際関係史). ニコラス ベーテルス.
- トルコ**: 文化人類学 (トルコ研究). 中山 紀子.
- エジプト**: エジプト学 (考古学). 中野 智章.
- 中華人民共和国**: 中国近現代文学 (表象文化研究), 教育学 (日本研究). 和田 知久, 于 小薇.
- 韓国**: 民俗学 (文化人類学). 平井 芽阿里.
- 日本 (沖縄)**: 財政学 (社会保障論). 羅 立新.
- ベトナム**: 音楽人類学 (民族学), 中国語 (音声学). 宗 婷婷, 伊藤 正晃.
- オーストラリア**: メディア学 (ジャーナリズム). 岩間 優希.
- 韓国地域研究 (人文地理学)**: 韓国地域研究 (人文地理学). 澁谷 鎮明.
- カナダ**: 国際政治学 (ジェンダー論). 羽後 静子.
- アメリカ合衆国**: 科学史 (博物館学). 財部 香枝.
- キューバ**: 国際関係学 (中南米地域研究). 田中 高.
- 英語教育学 (社会学)**: 英語教育学 (社会学). ハワード・ケン・ヒガ.
- 国際法学 (海洋政策)**: 国際法学 (海洋政策). 加々美 康彦.

中部大学国際関係学部教員の主な専門分野と研究フィールド

最新の情報は
こちらから!



国際関係学部教員の主な専門分野と研究のフィールド (2025年4月現在)
中部大学公式WEBサイト 国際関係学部ページより参照
URL <https://www.chubu.ac.jp/academics/international/>

国際関係学部と 民族資料博物館のコレクション

中部大学民族資料博物館の収蔵資料は、主に、中部大学国際関係学部（以下、国際関係学部）に関連した研究者たちが海外フィールドワークのなかで集めた民族資料と、学園が文化交流のなかで集めたコレクションの大きさは二つの集合体が母体となっています⁽¹⁾。収蔵点数約4,000点のうち、およそ3割にあたる1,200点余りが、国際関係学部によって収集されたものです。

国際関係学部では1984年（昭和59）の学部発足以来、研究と教育の一環として、世界の民族の暮らしを伝える資料の収集を進め、1992年（平成4）に学部の附属施設として「民俗資料室」を大学20号館に設置しました⁽²⁾。当時、1980年代から90年代にかけての資料収集については、文化人類学者の畑中幸子教授（現中部大学名誉教授）が中心となって、資料の選定や学内外の関連研究者へ協力を求めるなど尽力された様子が当時の各種の記録からうかがえます。その後、この資料室は、学内の附属図書館内へ移設され、展示空間作りに向けた2度の改修を経て、2011年（平成23）に大学機関に位置付けられる現在のかたちの大学博物館に展開していきました⁽³⁾。初代館長には、当時の国際関係学部長の和崎春日教授（文化人類学・民俗学）が着任されています。

館蔵コレクションのうち、国際関係学部による主な収集資料で最も多くを占めるのは、オセアニア地域、パプアニューギニアの祭礼具で、現在の博物館の常設展示の核を成しています。資料室から博物館へとリニューアルした際には、特にこの展示ゾーンを記念的な位置付けの場とみなし、かつての「民俗資料室」における展示形態をできるだけ維持継承していくよう図られました。そして今も来館いただいた方の目に最初に触れる場所に並んでいます。

なかでも特に注目していただきたいのは、壁面に設置している40点あまりの写真資料です。これらは、畑中先生が戦後1960年代後半から80年代にかけて、オーストラリア政府の現地調査に参加された際に、先生自らが撮影した調査研究用の写真で、当時、未踏地とされていた現地の様子を知るうえで大変貴重な記録です。博物館開館にあたり、畑中先生が陳列やキャプションの見直しに心を配られていたことが思い出されます。

この写真一枚一枚については、驚くことに現地の人々の親しみ深い、穏やかな表情がみとれます。撮影者である畑中先生がいかに周囲と信頼関係を築いていたかを物語っているといえるでしょう。熱帯の厳しい自然のなかに分け入り危険と背中合わせの過酷な環境に身を置きながらも、人間同士の交流を創り上げようと真摯に取り組まれていた先生の息吹を、現地の人々のはにかみながら微笑む様から一瞬にして感じ取ることができるのです。

悔やまれるのは、第二次世界大戦下で戦地となったニューギニアの地を研究対象に選ばれた先生の思いを、先生がお元気なうちにおききしてみたかったということです。今となっては、これらの写真資料が代弁してくれる役割のように思えてきます。実際のフィールド体験から先生が受けた衝撃の記憶、それは、言語を超越したところでの本質的な「人間」とは何か、「生きる」とは何かという問いに対して私たちに投げかけてくるかのように力強いものを感じます。

人間と人間の出会いから生まれる感動の記憶は、まさにフィールド調査を舞台に活動する研究者にとってはそれぞれ忘れがたい体験があることでしょう。民俗資料室時代の記録によれば、畑中先生につづき、その教育精神に共鳴した関連の研究者たちによって、オセアニア諸地域のほか、中東や西アジア、東欧、中国、台湾、韓国、中南米など、さまざまな国、地域にわたる資料が寄せられています

（別表参照）。主には、地域特有の自然気候のなかで育まれた生活文化を伝える生活道具で、産業革命以前の手仕事から発展してきたものが中心で、このたびの展覧会において紹介する、トルコの民族衣装他、アラビア半島における狩猟文化を伝える「鷹狩用の資料」[写真]、中国少数民族や中央アジアの民族楽器などもその一例です。

これらの多岐にわたる世界の民族資料を展示するにあたって、博物館開館当時は、「体験型の鑑賞」を展示テーマの特色とし、手に取ることのできる資料をできるだけ多く陳列していこう、という考えのもとに展示レイアウトが生まれ、見学者に自由に鑑賞していただく展示ゾーンが誕生しました。その後も学内外からの寄贈資料の受入れが続くなか、2018年以降は、企画展テーマをもとに収集資料の調査を徐々に続け、2020年の新型コロナウイルスへの対策期間に、思い切って展示コンセプトをもう一步踏み込み、「世界の陸と海の交流史」と掲げ、この視点にもつぎ技法や材料を軸に据えて展示用の資料の選別を試み、全体のゾーニングに統一感を出すことを重視して入替をしました。

このときの常設展示の再編を機に、常設から収納へ変更した資料も多数ありますが、一方で、同時期に導入したデータベース台帳への登録作業を開始し、WEBサイトを通じて紹介できる環境作りを進めています。今後は、各研究者の観点からフィールドと教室を結ぶような、多様な領域の授業の関心に応じて博物館資料が学びに利用される機会がさらに増えていくことを期待しています。（H）



「鷹狩用の眼套（かんとう）」（アラビア半島）
中部大学民族資料博物館館蔵
[2004年・堀内勝教授（現中部大学名誉教授）
により民俗資料室へ寄贈]

【別表】国際関係学部に関連した研究者による主な収集資料一覧
（主に民俗資料室時代を中心とした寄贈と購入）

〈寄贈〉(研究者別)			〈購入〉(地域別)		
	対象地域	点数		対象地域	点数
1	オセアニア地域、中国少数民族、東欧リニアの民族資料、工芸	181	1	オセアニア地域	83
2	アラビア半島の鷹狩資料、ラクダ用の装飾、道具	41	2	アフリカ地域	71
3	中国、台湾、日本の暦、風水に関連する書籍、道具	26	3	ヨーロッパ地域	86
4	オーストラリアのアボリジニの楽器、道具	23	4	西アジア地域	7
5	中国と韓国の生活道具、祭礼具	23	5	東アジア地域	266
6	中南米地域の工芸、祭礼具	5	6	南アジア地域	55
7	中南米地域の楽器	1	7	東南アジア地域	117
8	西アジア地域、トルコの民族衣装、食器	5	8	アメリカ地域	57
9	中国、日本の民族楽器、衣料	5		小計	742
	計	310	その他	写真資料（パネル化）	169
				合計	911

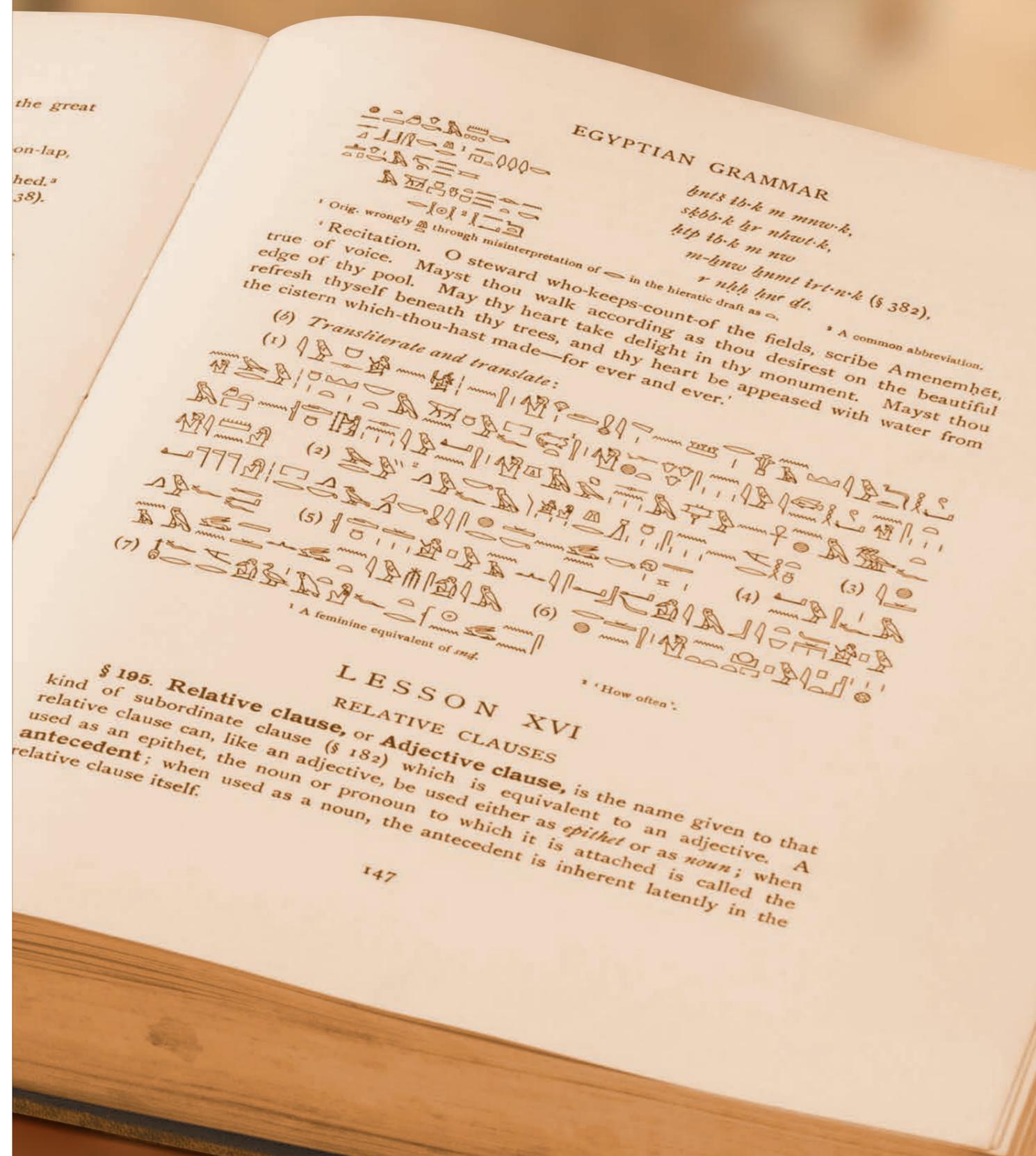
*記録があるものに限る。

*民俗資料室では地域別の分類を基準に記録されていた。
*記録があるものに限る。

注

- 「民俗資料室」の設置と収集活動には、当時の大学事務局長、大西良三先生（故人。のち学校法人中部大学 学園長：第3代理事長）のご支援があったことを博物館準備室時代に畑中先生よりおききしたことがある。開館時に新設した「シルクロード室」の名称は学園長によるもので、同室を象徴する絵画はいずれも平和をテーマにしている。大西学園長は、学園の草創期、戦後復興期における創立者縁の記念資料の保存にも心を砕かれ、「中部大学三浦幸平メモリアルホール」内の「三浦幸平記念室」の設置にも尽力された。畑中名誉教授と大西学園長、両者に共通するのは、戦争を知る世代として平和への思いの深さに他ならない。国際関係学部創設40周年記念とともに戦後80年を迎える今、再び心にとめておきたい。
- 民俗資料室の漢字表記は当時「俗」が使用されていたが、現在の大学博物館開館にあたり「族」の表記に改められた。
- 民俗資料室は、1995（平成7）に同大学内の附属三浦記念図書館に場所を移し、さらに2002年（平成14）に図書館内で展示面積を拡張し、2011年（平成23）に再拡張を行い、現在の大学博物館を開館するにあたって学園資料の一部が加わり、大学所属機関へと組織変更のうえ、名称が中部大学民族資料博物館となり現在に至っている。

研究紹介・図版・解説



文化人類学・トルコ研究

CULTURAL ANTHROPOLOGY & TURKISH STUDIES

専門分野は文化人類学。トルコの世俗主義、イスラーム、女性の相互関係に関心をもっています。

いまから30年以上前にトルコの西黒海地方のある村で1年間の文化人類学的調査をしました。博士課程の学生でした。なぜトルコに関心をもったかという、そもそも高校生のとき同級生に「顔が騎馬民族に似ている」と言われたことから大阪外国語大学モンゴル語学科に入学し、3年生のときにたまたま履修したトルコ語の授業でトルコにはまったことからでした。4年生になる春休みに友人と2人で2か月間のトルコ旅行にでかけ、聞きしに勝る親日的なトルコ人に驚くばかりでなく、それまでもっていたイスラームの厳しいイメージが「関西系イスラーム」とでも形容したいような明るいイメージに変わりました。もっと長くトルコに滞在したいと考え応募したロータリー財団から奨学金を得ることができ、1980年代にイスタンブールの大学に1年半通ってトルコでの留学生生活を堪能しました。

このトルコでの留学を経て私はトルコの人たちがどのように生活しているのかさらに深く知りたくなり、大学院に進学しました。人々について知るには文化人類学という学問がもっとも向いているとわかり、日本でも有数の文化人類学分野の牙城である国立民族学博物館に併設された総合研究大学院大学を選びました。当時の文化人類学の特徴は長期のフィールドワークを行うことでしたが、どこでフィールドワークをするか、また誰に受け入れてもらうかは学生が自分で探さなければいけませんでした。このとき役に立ったのはトルコの留学から日本に帰ってからずっと培ってきたトルコ人の友人のネットワークでした。京都で知り合ったイスタンブール大学地理学者の奥さんのお姉さんが協力してくれたのです。お姉さんが国民教育省の役人として働いていたトルコ西黒海地方ゾングルダク県で私を村々に連れて回り「遠く日本から来たこの日本人女性が滞在する村を探しています」と紹介し一緒に探してくれました。ある小学校の校長先生が自分の故郷の村にある奥さんの実家を推薦してくれて、しかも



「結婚式」
嫁取りの日に花嫁の前で踊る私(左端)。結婚式はクナーの夜、嫁取り、ドゥヴァクと3日間続く。一緒に踊っているのは結婚式で重要な役割を果たす料理人の女性。



中山 紀子
NAKAYAMA NORIKO

国際関係学部 国際学科
大学院国際人間学研究科
国際関係学専攻
教授

娘さん(23歳)を同行させてくれたのです。そこは奥さんの両親、弟夫婦、姉の5人家族の家でした。

さあ、フィールドワークが始まりました。トルコ語は1980年代に留学していたので話せるようになっていたはずでしたが、村での会話は黒海地方の言葉の特徴があって簡単には慣れず、また会話のなかの単語が人を指しているのか場所をさしているのか村に関する知識がないと理解できませんでした。最初のうちは娘さんが一緒にいてくれたのでわからないことを聞くことができましたが、そうそう彼女も私につきあってはくれません。5人家族のなかで一人で暮らすようになり、借りてきた猫のようにふるまっていました。家族は親切でしたが、なぜうちでこの日本人娘をあずかるのだらうと不思議に思っていたようでした。しかしだんだんと時が経つにつれて私がそれほど害を及ぼすことがないと理解してくれ、また私も持ち前の図太さを発揮して村の生活に慣れていき調査を進めることができました。

こうして私は旅行、留学、調査というそれぞれの形でトルコとつきあってきましたが、一貫してトルコ人の柔軟で実用性を重んじる場所を探求したいと思ってきました。



「村の風景(春)」
フィールドワークをした村は、1992年当時、人口477人、世帯数85戸の中規模の山村。春には木々にいっせいに花が咲き美しかった。



「村の風景(秋)」
村が位置するゾングルダク県にはトルコ有数の炭鉱があり、村の男性たちの多くは炭鉱労働の経験をもつ。かつては徒歩で山を越えて炭鉱に向かったという。

SELECTED WORKS

01

民族衣装(シャルワル)
(トルコ・現代) 着丈153cm
中部大学民族資料博物館蔵
(中山紀子 寄贈)

トルコを含む地中海東部地域には、男女ともゆったりとしたズボンを着用する伝統衣装がある。サイズや裁断、丈などはさまざまという。これは、伝統衣装をかたどった現代のものだが、幅広のパンツロン型のもの。引き紐で締めて、ウエストの折り目部分にギャザーを寄せるようになっている。ズボンの左右に金糸のモールを使った飾りが付けられており、華やかさを演出している。腰には、金属製のベルトを着け、装飾的な飾りの付いたサンダルで足元を飾る。

「学生時代、1985年に日本で開催された〈つくば科学博〉のトルコレストランで通訳兼アルバイトをしたときに記念にいただいた民族衣装です。会場では、これを身に着けトルココーヒーを作りました。ゆったりとして体の線がでないように工夫されています。」(中山)



02

民族衣料(スカーフ)
(トルコ・現代) 3種・70~90cm四方、1990~2010年代
個人蔵

「フィールドワーク地の女性は全員スカーフを被っていました。スカーフの縁取りは女性たちが自分でつくることが多く、その腕前がよいと称賛されていました。」(中山)

~トルコの女性用スカーフとその縁飾りについて~

「バシュオルトゥス」トルコ語 Başörtüsü
イスラム世界の女性がいるスカーフは多様で、さまざまな呼び方がある。トルコ語で一般的な名称には「バシュオルトゥス(頭を覆うもの)」がある。イスラム教徒の女性がスカーフを身につけるのは、イスラムの教えで、女性は髪や肌を隠すようにとされていることが理由とされる。一方、トルコでは、公的機関でのスカーフ着用は禁止や、その後規制が緩和されるなどといった経緯があり、現在は比較的自由度が高いといわれている。イスタンブールの街中では着用しない女性も多いものの、礼拝やモスクの中ではスカーフ着用が基本となっている。

「オヤ」トルコ語 Oya
トルコの伝統手芸の一つで、スカーフの縁飾りの総称。トルコでは、嫁入り道具を近所や親戚に披露する伝統がある。美しい「オヤ」を施したスカーフやタオルは、そのなかに欠かせないもので、「オヤ」の技術によって、花嫁の手先の器用さが評価されたといわれる。そのため、トルコの女性は母親から幼いうちに「オヤ」などの手芸を習う伝統が続いており、結婚が決まると、母親とともに「オヤ」を付けるスカーフを編んで準備する。また、女性たちが友人の家に集まり「オヤ」を編む時間は、かつては大切な情報交換の場で、娘が手芸を学ぶ場だけでなく、母親が息子のために花嫁候補を見定める場でもあったという。

「オヤ」には、技法や素材によって呼称がつけられている。

- ◎かぎ針を使う「トゥーオヤ」 tuğ oya (レース編み)
- ◎縫い針を使う「イーネオヤ」 iğne oya (糸を結んで作るレース編み)
- ◎手芸用具のシャトルをつかう「メッキオヤ」 mekik oya (シャトルに糸を巻いてそれを芯糸にまきつけ結び模様を作るタティングレース)
- ◎ピンを使う「フィルケテオヤ」 firketete oya (U字型のヘアピンを使い、かぎ針で編むヘアピンレース)
- ◎ビーズを使う「ボンジュクオヤ」 boncuk oya (ビーズは古来より魔除けのために使うとされてきた。)

[2024年度コーナー展示解説より]

03

民族衣装(ベスト)
(トルコ・現代)
材:羊毛のフェルト、52×60cm
中部大学民族資料博物館蔵
(中山紀子 寄贈)

「トルコの友人から贈られた羊毛製のベスト。トルコでは羊の放牧がさかんで羊の毛を使ったフェルトのベストを羊飼いがよく着ています。フェルトのベストは軽くて暖かいです。」(中山)



04

民族衣装(ベスト)
(トルコ・現代) 45×58cm
中部大学民族資料博物館蔵(中山紀子 寄贈)

「トルコの友人から贈られたベスト。現地の伝統的なキリム(織物)によく使われる美しい図柄がモチーフにあしらわれています。」(中山)



「村の風景(冬)」

トルコ黒海地方は日本と同じく四季がある。冬には降雪のため交通が閉ざされることもある。

エジプト学・考古学

EGYPTOLOGY & ARCHAEOLOGY

専門分野はエジプト学、考古学。古代エジプト文明の盛衰やヨーロッパに与えた影響について研究しています。

古代エジプト文明を扱う「エジプト学」が専門です。歴史好きの父の影響で関連書籍が身の回りにあったり、展覧会に行ったりしたことなどで興味を持ちました。中部大学にほど近い藤山台小学校5年生の折に名古屋市博物館で開催されたカイロ博物館所蔵古代エジプト展では、象形文字ヒエログリフに感動したことを当時の絵日記に記しています。

時代の影響か父が猛烈な会社人間で身体を壊して一時生死をさまよい、本当は歴史を学びたかったと日頃から話していたこともあり、自身は歴史の研究者になりたいと考えていました。大学進学時には「エジプト考古学」や「キリスト教考古学」という他大学にない授業があり、曾野綾子著の『太郎物語』で文化人類学に興味を抱いたこともあって、両者を学べる「人類学科」に進みました。名古屋の塾で開かれたセミナーの帰り道で購入した『エジプト学』（クセジュ文庫）を読んで、「これこそ自分がやりたいことに違いない」と感じたことも大きかったと思います。

ただ最初は英語で苦労しました。「エジプト考古学」を教えて下さった信州大(当時)の屋形禎亮先生は我が国におけるエジプト学の第一人者でしたが、まず読むべき本として大部のケンブリッジ古代史を勧められたものの、もたもたしているうちに卒業論文のテーマを決めなければならない時期になってしまいました。今も研究テーマの一つである「エジプト文明の形成」は、実を言えば三千年にわたる文明のうち、そこまでしかその本を読めていなかったというのが正直なところでした。

その後、後に指導教員となるエジプト学者が来日した際に知り合ったことがきっかけで大学院入学と同時に休学し、英国へ渡りました。現地では学部で一から学び直したものの、自身を入れて3名の少人数教育で基礎を固めることができたのは幸運でした。しかしながら、英語をはじめ仏語や独語などで書かれた多くの論文を読みこなし、何種類もの象形文字を解読して研究を進めるスタイルには当初なかなか慣れませんでした。

一筋の光明が差したのは、学部時代に地元や京都府などで発掘に出ている際の



中野 智章
NAKANO TOMOAKI

国際関係学部 国際学科
大学院国際人間学研究科
国際関係学専攻
人間力創成教育院 専門職教育プログラム
(学芸員課程)
民族資料博物館
教授



「カルナック神殿」
エジプト中部、紀元前2000年頃からローマ時代に至るまで、中王国時代や新王国時代の首都だったテーベ(ワセト)の東岸に設けられたさまざまな神殿の複合体。アメン・ラー、ムウト、メンチュウの3柱の神々にそれぞれ捧げられた神殿域で構成される。



経験が活かされたことです。日本考古学では土器などの遺物を徹底的に観察し研究しますが、論争が続いていたエジプト文明最初の王墓を考察した際には、その手法を用いてエジプトに輸入された土器を研究し、王墓の特定に成功しました。留学先では隔週で論文を書かされたのですが、次第に「何をやるかよりも何をやらないかを見極める」ことや「テーマに対してインパクトが高い対象を選ぶ」ことが重要であることを知り、英国で学んだ象形文字の読解力に日本で学んだ遺物などの観察力を組み合わせて研究することが自身のスタイルとなりました。現在はエジプト文明で扱われた一見何の変哲もない文様の数々が文字や絵などの代用だったことを突き止めたので、それを基に遺跡や遺物などの再解釈を進め新たな文明観を見出す研究を進めています。

エジプトへはこれまで30年以上に亘って調査や研究で訪れており、最古の階段ピラミッドや、最大のオアシスに残る文明末期の神殿アル・ザヤーンの調査などに参加しました。本を読むだけでは分からない環境や人びとの気質、食をはじめとする生活のあり方や習慣など、すべてが研究のヒントになります。なお、エジプトで発掘したものを持ち帰ることはできません。そのため今回の展示も複製品ばかりなのですが、どのような遺物などを用いて研究を進めているかを感じ取って頂ければ幸いです。

「沙漠の中での調査」
沙漠(水が少ないという意味で「沙」を用いる)の環境は厳しい。気温は昼50度、夜10度といった具合にかなりの上下差がある。遺跡では、発掘や測量だけでなく自然環境の調査も行う。今から数千年前も同じ環境であったとは限らず、古環境の調査も重要である。

「アル・ザヤーン神殿」
遺跡が残るのはナイル川周辺に限らない。水が湧き出る「オアシス」のうち最大のハルガ・オアシスで、今から二千年前の神殿調査に携わっている。ここは、エジプトはもとより、ギリシア・ペルシア・ローマといった大文明が進出したまさに「文明の十字路」である。

SELECTED WORKS

02

《シャブティ》(複製)
材：原物はファイアンス
個人蔵 高22cm

古代のエジプトでは、死者が来世で復活すべく肉体の保存を目的としたミイラ制作が流行したが、墓には来世で死者の代わりに労働などを行う「シャブティ」などと呼ばれる人形が副葬されることがあった。この種の人形はあざやかな青や緑系の色を呈するファイアンスという素材で制作されることがあった。



01

ナルメル王のパレット(複製・縮小版)
材：原物はスレート、23×33cm
個人蔵

出土遺物の持ち帰りはできないため、ここに紹介するのはいずれも複製である。このパレットはエジプトの国宝とも言える遺物で、初代の王ナルメルが棍棒を片手に敵を懲らしめる場面を描いている。象形文字や王権のイメージを示すこれらの図像は後代まで使用された。



03

脚のついた碗(複製)
材：原物はナイル沈泥
個人蔵 14×8cm

五千年以上前に作られたこのユーモラスな碗は、実は後代の象形文字の形を呈している。可能性は2つで、一つは「持って来る」のイニイ、もう一つは「清める」のウワブを意味している。我々は文字と絵、建築を分けて考えがちだが、当時はさまざまな物体に意味が込められることが良くあった。



04

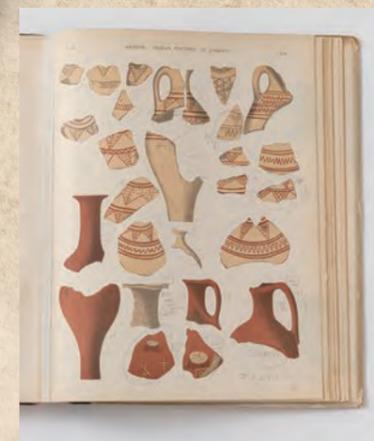
フウネフェルの「死者の書」(複製)
材：パピルス 85×43cm
個人蔵

死者が来世へ向かう際に必要とされる呪文などの総称である「死者の書」は、パピルスと呼ばれる古代の紙や墓の壁面などに記された。ここでは、死者のフウネフェルが生前の正しい行いを証明すべく、真実を示す羽根マアトと自身の心臓を秤にかける場面が描かれている。



05

[研究書籍]
W.M.Flinders Petrie, *The Royal Tombs of The Earliest Dynasties*, The Egypt Exploration Fund, London, 1901. PART II
[フリンダース・ピートリー著「初期王朝時代の王墓」1901年] 個人蔵 26×32cm
エジプト学では、過去の発掘報告書が今でも重要である。「エジプト考古学の父」と呼ばれるフリンダース・ピートリーが百年以上前に著したこの報告書には、海外からの輸入土器が彩画で描かれたページがあり、その分析から半世紀にわたる王墓の所在地論争を解く手がかりが得られた。



イギリス文学・ヨーロッパ文化

ENGLISH LITERATURE & EUROPEAN CULTURE

専門分野は20世紀前半のイギリス文学、イギリス文化、ヨーロッパ文化。
新しさを追い求めた時代のモダニズム文学、芸術、思潮について研究しています。

研究のきっかけとなった小説家ヴァージニア・ウルフ

19世紀末から20世紀初頭にかけて、サフラジェットによる婦人参政権運動がイギリスでは盛んになった。女性に参政権が与えられないという社会の矛盾に体当たりで立ち向かっていった人々であった。ヴァージニア・ウルフ(1882-1941)もまた社会の中で女性の置かれた立場に疑問を持ち、彼女の小説や評論などの書物の中で、男性中心のシステムと女性の立場を描き出し、繊細な表現によって批判を行った。それは直接的な批判ではなく、社会の中の権威、制度のあり方や構造の問題点を小説中の登場人物の視点や感情によって明らかにしたり、エッセイの中で主張したりと、文字による表現によって古い価値観を批判した。文学というのは一見静かで落ち着いているように思われるが、時にサフラジェットにも匹敵する戦闘性を持って社会問題を斬新に暴露していくのだ。

ウルフの文学というのはフェミニズムの思想が溢れているが、その手法はあくまで、文字での表現である。そしてその文学は現代に至るまで極めて影響力を持っている。ウルフはまた小説作法においても、登場人物の内面的意識を如実に表現する作法といった斬新な手法を用いた。その小説手法がゆえにウルフはイギリス文学におけるモダニズムの代表的な作家とみなされている。詩的な美しい叙述にもあふれ、イギリスの女性たちの心理にも触れることができるのが魅力である。文学という手段を用いて世の中を変えようとした意気込みには惚れ惚れとしたものがある。



伊藤 裕子
ITO YUKO

国際関係学部 国際学科
大学院国際人間学研究科
言語文化専攻
教授



「イギリス・カンタベリー大聖堂にて」

古より霊験あらたかとヨーロッパ中にその名が知れ渡り、巡礼者が後を絶たなかったイギリスの聖地。ジェフリー・チョーサーによる14世紀の『カンタベリー物語』は、巡礼者が大聖堂までの道すがら語ったという設定の物語集。ケンブリッジ大学での国際学会にて。



フィールド(地域)調査の様子、研究でめざしていること

1994年から1997年までイギリス・サセクス大学大学院に留学し、その後2005年ごろまで夏と春にはそれぞれ2ヶ月イギリス現地で研究生活を重ねた。その長期留学の際のイギリスでの現地調査は、現在の研究テーマの一つでもある20世紀初頭のロンドンを中心とした知識人の集まりであるブルームズベリー・グループの研究、またモダニズム期ヨーロッパ芸術研究につながっている。これまでの研究では、文学のみならず、イギリスやヨーロッパのモダニズムに関連した芸術や、ディアギレフ率いるロシア・バレエのイギリスモダニズムへの影響についても現地調査を行ってきた。

イギリスは研究環境が大変整っており、研究目的があれば誰でも平等に既存の資料を閲覧することが可能だ。特に大英図書館(British Library)は歴史上イギリス国内で書かれたり印刷された文書、書物、新聞、雑誌などが全て保管されており、それらを閲覧し調査を行うことができる。国立公文書館(National Archives)もまた、古地図、様々な事件についてやり取りされた文書まで、羊皮紙に書かれた古いものも含め保管されており、研究のために手にとることができるのだ。芸術関係の資料では、テイト美術館古文書館、演劇、バレエ関係ではヴィクトリア&アルバート博物館古文書館などで資料調査を行なった。惜しげもなく一研究者に必要な資料を目の前まで運んで来てくれるスタッフにいつも感謝である。2015-2016年の中部大学海外特別研究員時代には、ロンドン大学高等研究院客員教授として赴任し、文学における身体、五感に伴う感覚といった分野に着目し、理性的思考とは二項対立的に、時に劣ったものとして捉えられる領域がモダニズムの中でいかに活かされているのかについて、現地で文献調査を行ない、現在に至る研究テーマにつながっている。資料から浮かび上がる100年、またそれ以上昔の感覚や感情といったもの、また描かれた人々の会話といったものは文学から味わうことのできる時空間を超えた人間世界の醍醐味なのである。



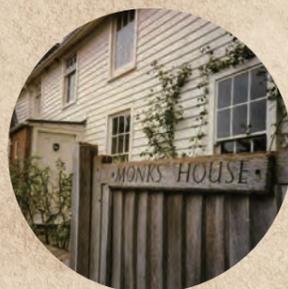
「アーサー王のモザイク画」

1165年完成のイタリア南部オトランドの大聖堂の床を彩るモザイク画、イギリスのアーサー王(REX ARTURUS)。5世紀から6世紀、ローマ帝国のために戦ったアーサー王の伝説が、遠い地中海世界まで伝播した証拠。ヨーロッパ文化圏の歴史の深さを物語る。



1998年、UKという国を知るため車で巡った旅の中で、イギリス本島最北端の地、スコットランドのジョン・オグローツ(John O'Groats)を訪れた。スコットランドは4つの地域からなるUKのうちの一つの国であり、ケルト民族の地であることを忘れてはならない。

SELECTED WORKS



「小説家ヴァージニア・ウルフの家
モンクス・ハウス (Monks House, Rodmell)」

ヴァージニア・ウルフは夫のレナードとイギリス南部のロッドメル村、モンクス・ハウスに住み、ロンドンの家とこの田舎の家とを行き来し、近くのチャールストン・ファームハウスに住まう姉や知識人の集まりブルームズベリー・グループと会合を重ねていた。



「サセクス・ダウンズ (Sussex Downs)」

ブルームズベリー・グループが田舎の家を持った丘陵地帯・サセクス・ダウンズ。美術評論家クライヴ・ベル、画家・美術評論家・ポスト印象主義工房「オメガ工房」創設者ロジャーフライ、画家ダンカン・グラントらが集い、この田舎の地に知的で芸術的な記号を与えた。

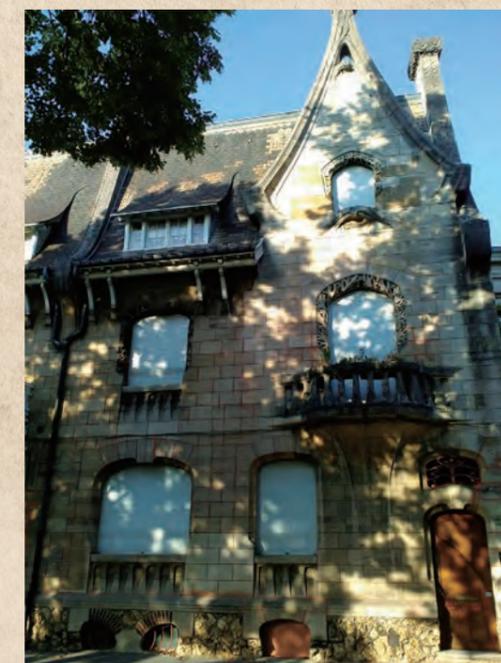


03

〔研究書籍〕
Edith Sitwell, Illustrated by I. de B. Lockyer,
The Russian Ballet Gift Book,
Leonard Parsons, London, 1921.
19.5×25.5cm

〔イーデイス・シットウェル著
「ロシアバレエ・ギフトブック」1921年〕

ブルームズベリー・グループも足繁く通った、セルゲイ・ディアギレフ率いるロシア・バレエ作品のスケッチ入りバレエガイドブック。特に知識人の間でモダンなスタイルの音楽、舞踊、舞台芸術がもてはやされ、20世紀初頭文学、芸術、ファッションにも影響を与えた。



「アール・ヌーボー建築様式の民家」

フランス・ロレーヌ地方ナンシー市内の曲線美を活かしたアール・ヌーヴォー様式の建築物。世紀末から20世紀にかけ新しい芸術形式を求めて、絵画、インテリア、布の図柄などに至るまで様々な作品が制作された。モダニズムも含め新しい芸術様式が生まれた時代である。

著作権への対応のため
WEBサイト版では
画像を未掲載としています

01

〔研究書籍〕
Roger Fry, *Flemish Art : A Critical Survey*,
Chatto and Windus, London, 1927.
20×25.5cm

〔ロジャー・フライ著によるフランドル派美術批評の書。1927年の初版本
(表紙デザインはフライによる)〕

ブルームズベリー・グループの芸術家・美術評論家、フライ (1866-1934) が開催したイギリス初のポスト印象主義展は、写実主義一辺倒であったイギリス画壇にショックを与え、美術たるものは審美的な感動や恍惚感をもたらすものであるべきだとした。



02

〔研究書籍〕
Virginia Woolf,
Flush : A Biography,
The Hogarth Press, London, 1933.

〔ヴァージニア・ウルフ著の小説「フラッシュ伝」1933年の初版本〕

ウルフはモダニスト小説の手法、「意識の流れ」の手法を犬に適用し、19世紀の詩人エリザベス・バレット・ブラウニングのスペイン犬、フラッシュの視点からエリザベスの生活や犬としての波乱万丈の一生を描いた小説である。嗅覚的な観点から犬の意識を描き出した。



音楽人類学・民族学

MUSIC ANTHROPOLOGY & ETHNOLOGY

専門は音楽人類学、日中古代文化交流史。中国雲南省道教儀礼音楽についての研究をしています。

中国古都・西安に生まれ、18歳の時に日本へ留学しました。大学時代から文化人類学に関心を持ち、修士課程から現在に至るまで、音楽人類学者として中国雲南省の山岳地帯・麗江に暮らす納西(ナシ)族に伝わる、500年前の道教儀礼音楽「納西古楽」の研究を続けてきました。

納西族は、中国の少数民族の中でも人口わずか32万人ほどの小さな民族です。しかし歴代の酋長たちは、中原王朝からの庇護を得るために、漢民族の文化を積極的に自民族へ取り入れてきました。さらに彼らの居住地である麗江は、都会から遠く山に囲まれているため、500年前の南京や西安の宮廷音楽、道教儀式、建築や信仰が封じ込められるように伝承され、納西族によって大切に守り継がれてきたのです。

また、古代漢民族文化と並んで、納西族が古くから信仰してきた土着宗教「東巴教(トンバ)」も現存しています。その際に用いられたトンバ象形文字はいまも使用されており、消滅の危機を乗り越えてユネスコ「世界の記憶」に登録されました。さらにこの地域では、

- 世界文化遺産「麗江古城」(1997年)
- 世界記憶遺産「納西トンバ古籍文献」(2003年)
- 世界自然遺産「三江併流」(2003年)

の三つが同時に登録されるという、中国唯一の希少な事例が実現しました。今回の展示では「トンバ経」の経典やトンバ象形文字の書籍も複数展示紹介します。



宗 婷婷
ZONG TING TING

国際関係学部 国際学科
大学院国際人間学研究科
国際関係学専攻
准教授



01
《(陶製の笛) 埙(しゅん)》
(中国・1980年代) 高9cm
個人蔵

埙(しゅん)は世界最古の吹奏楽器のひとつであり、その起源は約7000年前の新石器時代にまでさかのぼる。材質は主に陶土や石であるが、骨や玉を用いたものも存在する。音色は深みと厚みを備え、素朴でありながらも悲しい響きを持つとされ、中国では古くから戦場のあとや悲哀を表す場面などで演奏されてきた。五行では「土」に属する関係から、養生の楽器として文人に愛され、「詩経」や「礼記」にも埙に関する記述が見られる。



音楽人類学の研究者として、私は今回の展示で納西文化以外にもう一つご紹介したいテーマがあります。それは「東アジアから中央アジア、西アジアへと広がる弦楽器の流れ」です。以前、私が寄贈した新疆ウイグル族の民族楽器の「ドゥタール」を含め、東西をつなぐ弦楽器の実物を通じて、その文化交流を体感していただきたいと思います。ペルシャの弦楽器ウードを源流とし、東へ伝わると「中国琵琶」や「日本の筑前琵琶」へ、西へ進むとトルコの「サズ(サーズ)」、ギリシャの「ブズーキ」、そして最終的にギターへと変容しました。これらの楽器の変遷は、2000年にわたるシルクロードのキャラバン交易が生み出した文化交流の結晶とも言えるでしょう。

今回展示している品々は、私が長年の現地調査で収集してきたものの一部です。どうぞ先人たちが残してくれた貴重な文化遺産に触れ、その魅力と歴史のロマンを想像しながらご鑑賞ください。

02

民族楽器《ドゥタール》
(中国・新疆ウイグル自治区・1980年代)
高131cm 中部大学民族資料博物館蔵(宗 婷婷 寄贈)

ドゥタール(都塔尔)は、ウイグル語で「二本の弦」という意味を持つ、中国・新疆ウイグル族を代表する重要な弦楽器である。起源はペルシャの楽器リュートにさかのぼり、約2000年前にシルクロードの交易と文化交流を通じて新疆に伝わった。その後、ウイグル族の文化と融合し、現在の形へと改良された。演奏法は指で二本の弦をはじくもので、ギターに似た音色を奏でる。ウイグル族の文化遺産である古典音楽「十二ムカーム」の伴奏楽器として、また独奏や弾き語りの伴奏楽器として広く親しまれている。

03

民族楽器《タンブール》
(中国・新疆ウイグル自治区・1970年代)
高143cm 中部大学民族資料博物館蔵(宗 婷婷 寄贈)

タンブールはウイグル族やウズベク族がよく用いる伝統的な楽器で、歴史は古く、形は素朴である。琴身は桑の木や紅木で作られ、共鳴箱は小さく、ひょうたんのような形をしています。共鳴箱の表面には音孔がない。5本の弦を持つ撥弦楽器で、音域が広く、音色は澄んでいる。独奏・合奏・伴奏などによく用いられ、ドゥタールと同様に、新疆ウイグル族の古典音楽「十二ムカーム」を演奏する主要な楽器の一つである。



儀礼音楽を調査している時にいつも得意な楽器、中国琵琶を持ち歩いている。この写真は2024年6月中国雲南省騰冲道教儀礼音楽会「和順桂川会」の楽譜を調査した際に試奏している様子(中央 本人)

SELECTED WORKS



06

民族楽器《ブズーキ (Bouzouki)》

(ギリシャ・1980年代) 材: 桐 高96cm 個人蔵

ギリシャの主要な弦楽器である「ブズーキ」は、ベルシャのリユートの影響を受け、古くからダンス音楽や独奏楽器としてギリシャ人に愛されてきた楽器である。弦の構成も独特で一般的に3コース6弦(トリコルド)または4コース8弦(テトラコルド)があり、複弦で構成される。この楽器を私はギリシャの壁画に描かれた弦楽器の調査に赴いた際に入手した。同じ祖先を持つため、中国琵琶と奏法に類似点が見られる楽器である。



04

民族楽器《蘆笙 (ろしょう)》

(中国・苗族・ミャオ族/モン族・年代不明)

材: ひょうたん、竹 70×60×8cm

中部大学民族資料博物館蔵(宗 婷婷 寄贈)

この形の蘆笙は、中国西南部の雲南省や貴州省、さらにチワン族自治州に住む少数民族である苗族、ドン族、タイ族、チワン族などが、祭りや冠婚葬祭の際によく使用する吹奏楽器である。演奏形態は、ソロから合奏までさまざま、男性が踊りながら演奏することもある。サイズは小型のものから大型のものまであり、ほとんどが手作りで作られている。蘆笙は中国だけではなく、国境線が隣接している関係で東南アジアのミャンマーやタイにおいても演奏されている。

05

民族楽器《サーズ (Saz)》

(トルコ・1980年代)

材: 桐 高120cm 個人蔵

東洋の琵琶と同源でトルコをはじめ中東から中央アジアにかけて広く用いられている撥弦楽器で、特にトルコの民族音楽を象徴する楽器である。一般的には「バラム (Bağlama)」とも呼ばれ、地域や奏法によって多様な種類が存在する。音は澄んでいながらも温かみがあり、旋律を装飾する細かい音型や即興的な演奏に適している。オスマン帝国時代には吟遊詩人(アーシュク/ Aşık)の伴奏楽器として重要な役割を果たした。



07

トンパ経(東巴)の経典

(中国雲南省・納西族/ナシ族・1800年代)

材: 樹皮、60×24cm 個人蔵

樹皮で作られた骨董品で、なかなか手に入らない貴重な品である。よく見ると、表面にはトンパ文字で書かれた経文のほか、トンパ教におけるもう一つの貴重な要素である「トンパ画」が描かれている。そこにはトンパ教の守護神や神獣が表されており、恐らく儀式の際に祈祷や舞踊を行うとき、手に持って用いられた神器の一つであったと推定される。



08

民族衣装

(中国雲南省・納西族/ナシ族・1990年代)

高142cm 個人蔵

納西族の女性の民族衣装。勤勉を象徴する北斗七星を模した頭飾り、蛇と蛙のように沢山の卵が産める(子孫繁栄)事を祈って、前は蛇の形、後ろは蛙の形を模した上半身の飾り、そして金沙江を象徴する黄色のエプロン、民族が継承してきた奥深い世界観を物語っている。



09

マニグルマ(转经筒)

(中国・チベット・2000年代) 材: 黄銅 高18cm 個人蔵

チベット仏教の祭礼具。チベット語では「マニコルマ」と呼ばれる。マニグルマは、チベット仏教で用いられる回転式の経筒である。信者は経文を筒の中に納めたマニグルマを回すことで、経文を唱えたのと同じ功德を得られるとされ、巡礼や祈願の際に広く用いられている。多くは金属(銅やブロンズ)で作られるが、木や石、樹脂などで作られるものもある。筒の内部には小さく巻かれた経文(マニ経文)が収められ、外側には仏教のシンボルや吉祥文様、場合によっては宝石があしらわれることもある。普段は寺院や家庭、巡礼路に置かれ、日常的な礼拝や特別な祭祀に用いられる。近年では観光客を集めるため、チベット仏教地域において巨大なマニグルマを制作することも流行している。

「ハイブリッド・プロジェクト」



国際学科に特徴的な授業形式の一つ「ハイブリッド・プロジェクト」(イメージ)

講 義や実習、ゼミナール、講演会など、大学では学生も教員も日々さまざまな形で互いに学んだり、話をする機会がありますが、それとは別に大学の帰り道にふと立ち寄ったカフェでの友人との話が面白かったり、あるいは講演会の後の居酒屋での議論が盛り上がり、といったことは日常的に良くあることと思います。

なぜ唐突にこんなことを記すのか、と思われるかもしれませんが、ここにご紹介する国際学科に特徴的な授業形式の一つ「ハイブリッド・プロジェクト」は、学会や研究会などの後で開かれる懇親会でのそうした「話の面白さ」や「議論の楽しさ」を学生たちにも体験させてあげることができないか、ということで、今回の展示会にもご参加いただいている中山紀子教授(文化人類学がご専門でフィールドはトルコ)が考案されたものでした。

とは言っても、別にコーヒーを出すのでもお酒が出てくるということでもないのですが、そうした場所では教員もお互いの専門に凝り固まるのではなく、自由に思うところを述べながら時間も気にせず議論するのが楽しい、ということで、そこに学生も混ぜてみたらどうだろうか?というところから始まった案だったように記憶しています(中山先生には、もし当方の勘違いだと思ったら申し訳ありません)。

通常の講義では、教員1人が大勢の学生に向かって話しますが(東京あたりのマンモス大学では、実際の登録学生よりも教室の座席数が少ないなどというまことしやかな噂も聞いたことがありますが)、この「ハイブリッド・プロジェクト」には学生が十数名くらいに対して教員が複数名入り、一つのテーマについて議論します。

今は外れているのですが、私も以前に何学期かこの授業を担当(というよりは参加)しました。ここでは教員も学生もフラットな関係で、お互いに教え合い、学び合う、あるいは議論を交わすことが重要です。実際に、普段はどちらかというとボーっとしているように見えた学生が、あるテーマについてはとうとうと語ったり、教員もタジタジとなるような意見を述べたりと、面白かったものは今でもメモで残しているくらいです。

この授業形式については、一つの授業を複数の教員で担当するなんて、サボってるんじゃないかと時折誤解を受けることがあるのですが、とんでもない話で、ここではそんなヒマはありません。いい加減にやっていると、別に喧嘩をするわけではないのですが、逆に学生にやり込められてしまうこともあります。もっとも、参加者の面子が教員学生ともに誰かに依る面もあり、思ったほど盛り上がりがないこともあるのですが、そんな時はちょっと教員モードに戻って、いくつか仕掛けを試してみます。

でも考えてみれば、これがもともとは学校という場の始まりのようなものなのでしょう。自身の学生生活を振り返ってみても、留学先の授業は議論が大半でしたし、それこそセミナーでは、皆が有名どころの発表者に対し

手ぐすねを引いて待ち構えていたような気がします。学生寮での食事時間には、仲間内で固まってしまうことがないよう異なる専攻の学生をわざと隣に座らせることも行われていました。大学が持つ役割の一つは、さまざまな概念や意見をぶつけ合い、新しいモノを創造するところにあるように思うのですが、そうした「耳学問」はやはり馬鹿にならないということだったのでしょう。文理医教の8学部を擁する本学であれば、本当はこうした授業こそもっと色々な人に入ってもらいたい気もします。

ただ、開始から10年が経ったこの「ハイブリッド・プロジェクト」に現時点でまったく問題がないわけではありません。一つは当初からやや懸念されていたのですが、学習意欲がやや乏しい学生はそもそも履修を登録せず、興味がある人も登録には少し勇気が必要で二の足を踏んでしまう傾向が強いこと、そしてもう一つは、(実際にやってみてなるほどと思ったのですが)学生の興味と教員の興味では時にかなりのジェネレーション・ギャップがあり、そうした際にはまずテーマの説明から延々と始めなければならないことがあることです。

それでも、教員もちょっと緊張しながら臨むこの「ハイブリッド・プロジェクト」は、さまざまな地域や専門分野の教員はもとより、やはり色々な関心をもって国際関係学部に進学してきた学生たちがお互いの意見や考え方をぶつけ合うことで、「中部のククサイ」で学ぶ学問の多様性や、それを超えたモノの見かたや考え方の幅広さや深さを知る、貴重な授業空間となっています。

年度によってはそれに飽き足らず、学生同士でロシア語の勉強会を開いたり、自主ゼミのようなものを開いていた人たちもいましたが、きっと学生生活の良い思い出になったことでしょう。そんな自由な学びを促す仕掛けの「ハイブリッド・プロジェクト」をさらにパワーアップした形で提供していきたい、それにはこの民族資料博物館を活用してみるのも一つの手ではないか、個人的にはそんなことも考えている次第です。(N)

「エジプトの調査」

一口にエジプトと言っても、北と南、東と西では最大幅がそれぞれ1,000kmほどあることはご存じでしょうか。北は地中海、南はスーダン、東は紅海、西はリビアなどと接しているわけですが、中部大学を基点に考えれば札幌くらいまでの距離ではあるものの、気候や植生はもちろんのこと、人種や人びとの暮らしにも結構な差があります。

カイロへ初めて降り立つ訪問者がまず驚くのは、車の排気ガスとクラクションの音。もっともその前に、空港から市内へと向かうタクシーの猛スピードに、思わず床をブレーキのように踏みしめてしまうかもしれません。なぜF1ドライバーがエジプトから生まれないのかと不思議に思うくらい時にアクロバティックな運転は、イタリアでタクシーに乗ると同じくらいのスリリングさがあります。ただ、近頃はカイロでもUberなど配車サービスが導入されたため、以前のようにタクシーの品定めから始まる一種の緊張感は、やや緩和されました。

そしてカイロの中心部ともなれば、タラト・ハルブなどの繁華街ではとにかく人の多さにびっくり。エジプトを訪れるようになってかれこれ30数年が経ちますが、毎回人口が増えているように思うところ。最近ではだいぶ増えたものの、かつては横断歩道を見てもほぼありませんでした。慣れない頃は道路を渡るのも命がけで、地元の人の後ろに隠れて一緒に渡って(渡らせてもらって)いたことを思い出します。ただし車を運転している方は、どこから人が出てくる可能性があることをかなり意識しているようではありません。

大ピラミッドで有名なギザや、カルナック神殿や王家の谷などが控えるルクソールでは土産売りや客引きも多く、そうした人たちとのやり取りもまた楽しい一時ではあるのですが、調査となるとさすがにそうした観光モードだけというわけにはもちろんいきません。

アラブの春以降、情勢も不安定で依然として調査許可が下りない状況が続いているのですが、カイロやルクソールといった大都会であつたり世界的な観光都市とは異なり、ナイル川流域から数百キロ離れたエジプト最大のオアシス、ハルガで2千年ほど前に建造された神殿遺跡の調査に携わりました。東京工業大学の名誉教授である亀井宏行先生は、我が国における遺跡探査の第一人者として知られる方ですが、先生がエジプト政府から依頼されたアル・ザヤーン神殿の調査に、エジプト学の専門家として参加しました。

最初にこの地を訪れたのは今から20年近く前のことでしたが、まず感じたのは空気がキレイということ。カイロの排気ガスは、一日の終わりに鼻をかむとティッシュが真っ黒になってしまうくらいなのですが、ハルガではそんなこともなく、人びとも皆のんびりして都会のせわしさはありません。今では飛行機で1時間半もあれば着いてしましますが、当初はカイロからバスで10時間以上掛かり、途中休憩もわずかに数回しかなく、着いた頃には足がガクガクしました。

エジプトの遺跡調査では、必ず考古省から査察官(インスペクター)が派遣され、外国から来た調査隊の様子をチェックしているのですが、ある時お世話になった方はまだ大学を出て数年の若い女性でした。もとはカイロに次ぐ第二の都市アレクサンドリアの出身だそうで、こんな田舎へは来たことがないとこぼしていました。食事も毎日同じマトバスタしか食べず、こちらが健康を気遣ったくらいです。

ハルガの中心部にはマーケットがあり、野菜や果物が豊富に売っているのですが、太陽の光をさんさんと浴びたその美味しさは格別です。ただし古代においてはまさに辺境の地であつたであろうこと

は想像に難くなく、その査察官の女性が鳥流しのような心境だったように伺った際には何となくその気持ちも腑に落ちました。

ただすごいのは、現代でもかなりの田舎と思えるような過酷な環境下にあるそうした地でも、古代に多くの人びとが行き来していた痕跡が見えることです。私たちが沙漠の奥へ進む際にはランドクルーザーのような車2台で移動し(1台がスタックしたり故障したりした際の安全を確保するため、ガソリンと水も積んで移動します)、大きな窪みなどは時にジャンプするような感じにもなるのですが、そうしたところを抜けると、今から2千年以上前の砦や神殿の址が残っていたりします。

中でも我々が調査したアル・ザヤーン神殿は「文明の十字路」とも言うべき地にある遺跡で、エジプトはもとより、ペルシアやギリシア、ローマといった大文明が周辺の遺跡を含め何らかの痕跡を残しています。現在とは異なり、水がある程度豊富だった可能性もあるのですが、今のスーダンにもつながる陸上輸送の拠点でもあつたようです。

日本からの調査隊は大学が休みの夏や冬、春といった期間にしか活動ができないのですが、夏の日中は50度近く、冬の朝方などは10度まで下がる気候では、朝は夜明け前に起きて日の出とともに作業を始めるような感じで、それも日差しが強くなる昼くらいまででせいぜい数時間しか調査ができません。後は宿舎に戻って調査の記録をつけたり、資料整理をしたりして過ごします。

この調査には、民族資料博物館の外部委員をお務め頂いている東京国立博物館の阿児雄之先生も磁気探査などを実施する亀井研究室の一員として参加されていたのですが、神殿の脇で発見された窯址と思われる遺構を調べる日本考古学の専門家、土器などの保存修復を専門にされる方、古環境の専門家など、まさに文理融合のさまざまなメンバーで構成されていました。調査時間の合間にみんなで周辺を踏査することもあつたのですが、衛星画像で同僚が見つけた古代の水路の址が、今でもほぼそのままの形で残っており、古環境を専門とされる先生から当時の状況をご説明頂いたのには非常に感動した次第です。

我々エジプト学班は神殿の内部を担当し、敷石や一部階段状の構造物を発見したのですが、類例をまだ見つけることができておらず、なぞは深まるばかりです。敷石のそばにはベンチ状の遺構が残り、お猪口ほどの大きさのガラス碗なども出土したため、ナイル川流域に残る典型的な神殿の構造とは異なり、地域の集会所的な役割も兼ねた宗教施設だったのではないかと推測しています。

滞在中は日が経つにつれ疲労も溜まり、そろそろ日本に帰りたいと思うこともあるのですが、帰国するとまたすぐ行きたいと思わされるような不思議な場所です。過酷な環境を生きた人々の痕跡を追い求めることで、今の自分たちが失ってしまったものを探しているような気にもなります。欧米の調査隊もあまり入っておらず、手つかずの遺跡や遺物が山ほど残っており、とても自身の一生では足りそうありません。(N)



2025年度 中部大学民族資料博物館秋季企画展 「中部大学国際関係学部創設40周年記念展～私とフィールド、私のココサイ」出品リスト

主 催：中部大学民族資料博物館

協 力：中部大学国際関係学部

会 期：2025年11月1日(土)～12月22日(月)

会 場：中部大学民族資料博物館

	名称〔カッコ内図録番号〕	種別	寸法(cm)	参考年代(書籍は出版年)	
文化人類学・トルコ研究／中山紀子教授					
1	トルコの民族衣料(スカーフ) [02]	衣料 3	90cm四方ほか	1990～2010年代	
2	〔研究資料〕フィールドワークをした村の地図、人口台帳とそれをもとにした家系図(複写)	記録(写) 2	—	調査地：トルコ西黒海地方 調査時期：1992-1993	■
3	〔研究著書〕『イスラームの性と俗』(中山紀子著・トルコ語版) NAKAYAMA Noriko, Köy kadını, <i>Modernite ve İslam</i>	書籍	15×21	Tarih Vakfı Yurt Yayınları, Türkiye, 2021.	■
4	〔研究著書〕『イスラームの性と俗』(中山紀子著・日本語版)	書籍	13×19	アカデミア出版会、日本、1999年	■
5	トルコの民族衣装 [01]	衣料	15.3×53×65	中山 紀子 寄贈*	
6	トルコの民族衣装(ベスト) [04]	染織衣料	45×58	中山 紀子 寄贈*	
7	トルコの民族衣装(ベスト) [03]	毛織衣料(羊毛)	52×60	中山 紀子 寄贈*	

エジプト学・考古学／中野智章教授					
8	ナルメル王のパレット(複製) [01]	パレット(原物はスレート)	23×33	初期王朝時代、紀元前3100年頃	
9	フウネフェルの「死者の書」(複製) [04]	葬祭用文書(パピルス)	85×43	新王国時代、第19王朝、紀元前1300年頃	
10	人の足がついた壺(複製) [03]	土器(原物はナイル沈泥)	14×8	先王朝時代、ナカダⅠ期後半からナカダⅡ期、紀元前3700-3450年頃	
11	《シャブティ》複製 [02]	副葬用人形(原物はファイアンス)	高22	後期王朝時代、紀元前664-332年頃	
12	〔研究書籍〕古代エジプト語文法 <i>Egyptian Grammar</i>	書籍	25×30	Oxford Univ.Press, London, 1927 (1), 1950 (2), 1957 (3)	■
13	〔研究書籍〕フリンダース・ビートリー著『初期王朝時代の王墓』 <i>The Royal Tombs of The Earliest Dynasties</i> , 1901. PART II [05]	書籍	26×32	The Egypt Exploration Fund, London, 1901.	
14	〔研究書籍〕ライデン国立古代博物館所蔵 古代エジプト展図録 <i>Egypt, Land of Discoveries</i> (中野智章監修)	書籍	22.5×29	東京新聞、中日新聞社、フジテレビジョン、日本、2020年	■
15	〔研究書籍〕京都大学総合博物館 国際シンポジウム抄録集 <i>From Petrie to Hamada, Egyptian Antiquities of Kyoto University</i>	書籍	21.4×29.6	Kyoto University Museum, Japan, 2016.	■
16	〔研究書籍〕京都大学総合博物館 考古学資料目録 エジプト出土資料	書籍	19×26.5	京都大学総合博物館、日本、2016年	■
17	〔研究書籍〕東京工業大学大学院情報理工学研究所 亀井研究室調査報告書 EL-ZAYYAN 2003-2006 / EL-ZAYYAN 2007-2010	冊子2	21×29.7	Kamei Laboratory, Graduate School of Information Science and Engineering, Tokyo Institute of Technology, Japan, 2007.	■
18	アラビア半島の鷹狩用の眼套(雫のはく製に装着)	革	27×31×57	眼套：堀内 勝(本書 8頁掲載)(中部大学名誉教授) 寄贈*	

イギリス文学・ヨーロッパ文化／伊藤裕子教授					
19	〔研究書籍〕ロジャー・フライ著、フランドル派美術批評、初版本 [01] <i>Flemish Art: A Critical Survey</i>	書籍	20×25.5	Chatto And Windus, London, 1927.	
20	〔研究書籍〕ヴァージニア・ウルフ著、ロジャー・フライ評伝、初版本 <i>Roger Fry: A Biography</i>	書籍	14.5×22	The Hogarth Press, London, 1940.	■
21	〔研究書籍〕ヴァージニア・ウルフ著、小説、初版本 [02] <i>Flush: A Biography</i>	書籍	15×22	The Hogarth Press, London, 1933.	
22	〔研究書籍〕イーディス・シットウエル著、ロシアバレエ解説 [03] <i>The Russian Ballet Gift Book</i>	書籍	19.5×25.5	Leonard Parsons, London, 1921.	
23	〔研究書籍〕デニス・E・ローズ編、18世紀イギリス料理レシヒ本、ダンカン・グラントの挿絵付き <i>In An Eighteenth Century Kithchen: A Receipt Book of Cookery</i>	書籍	14×22	Cecil Woolf, London, 1968 (1) 1983 (複製).	■

音楽人類学・民族学／宗婷婷准教授					
24	ギリシャの民族楽器《ブズーキ(Bouzouki)》 [05]	楽器(桐)	高96	1980年代	
25	トルコの民族楽器《サーズ(Saz)》 [06]	楽器(桐)	高120	1980年代	
26	中国(納西族・ナシ族)の民族衣装 [08]	衣装	高142	1990年代	
27	中国・トンバ(東巴)経の経典 [07]	図(樹皮)	60×24	1900年代	
28	中国・チベットの祭礼具《マニグルマ》 [09]	工芸(黄銅ほか)	高18	2000年代	
29	中国・吹奏楽器 陶製の笛 埙(しゅん) [01]	楽器(土)	高9	1980年代	
30	思普古茶磚(プーアル茶)	茶葉	10×14.5×2.5	1970年代	■
31	〔研究書籍〕納西京巴經典名句欣賞(トンバ象形文字の辞書)	書籍	20×17.5	云南美術出版社、中国、2005年	■
32	中国・トンバ象形文字で書かれた経典	書(樹皮)	24.5×10	2000年代	■
33	中国・トンバ象形文字で書かれた経典	書(樹皮)	28×9	2010年代	■
34	中国(苗族・ミャオ族、モン族)の民族楽器《蘆笙(ろしょう)》 [04]	楽器(竹、ひょうたん)	70×60×8	宗 婷婷 寄贈*	
35	中国(新疆ウイグル自治区)の民族楽器《タンブール》 [03]	楽器	高143	1970年代 宗 婷婷 寄贈*	
36	中国(新疆ウイグル自治区)の民族楽器《ドッターール》 [02]	楽器	高131	1980年代 宗 婷婷 寄贈*	
37	日本の民族楽器《筑前琵琶》	楽器	高85	宗 婷婷 寄贈*	■

*：中部大学民族資料博物館蔵(以外は個人蔵) ■図録未掲載

2025 中部大学民族資料博物館 秋季企画展

中部大学国際関係学部創設40周年記念展～私とフィールド、私のココサイ

2025年10月31日発行

発行 中部大学民族資料博物館

館長 中野 智章

住所：〒487-8501 愛知県春日井市松本町1200

電話：0568-51-9193 ファックス：0568-51-9194

印刷：株式会社ITP

デザイン：アシタノデザイン株式会社

撮影：タカギ ユウスケ

©中部大学民族資料博物館(禁無断転載)

©2025 The Museum of Ethnology Art, Chubu University, Japan

All rights reserved.

[Exhibition]

2025 The Museum of Ethnology Art, Chubu University Fall Exhibition

“Chubu University College of International Studies 40th Anniversary Exhibition

– My Field, My International Studies” The Museum of Ethnology Art, Chubu University,

Kasugai-shi, Aichi-ken, Japan

[Catalogue]

Edited by: Prof. NAKANO Tomoaki, Prof. OBA Yuichi, NAKAMURA Masao, HARADA Chikako, The Museum of Ethnology Art, Chubu University

Printed by: ITP Inc.

Designed by: Ashitano Design Inc.

Photo by: TAKAGI Yusuke

Published by: The Museum of Ethnology Art, Chubu University

Matsumoto-cho 1200, 4878501 Kasugai-shi, Japan

Tel +81-568-51-9193 E-mail: chubu-minzoku@fsc.chubu.ac.jp

©2025 The Museum of Ethnology Art, Chubu University, Japan

All rights reserved.